

(別紙の2)

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月1回の職員会議や毎日行う朝・夕の申し送りで話し合いをし職員は理念を共有し統一介護を行っている。新規に利用を開始する本人と家族には重要事項と理念を説明し納得頂いている。玄関に来訪者にも解かる様運営規定を掲示している。職員一人一人が理念をしっかり頭に入れ日々の介護をしている。	グループホーム独自の五つの基本理念があり、管理者と職員は会議や申し送りなどで意思統一をしている。職員への周知はされており理念にそぐわない言葉や態度が職員に見受けられることは極まれにしかないが、そのような場合には内容に沿って管理者から十分納得の行くように個別に話しをしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	区に加入し区費や神社費を支払っている。区の新年会や清掃活動に参加している。地域住民との交流を深めるよう職員に挨拶の徹底をしている。ホームの敬老会には近所の方に参加して頂くように声を掛け都合の付く方に参加して頂き、参加出来なかった方には手作りのお菓子を配った。	地区の民生委員を通じて運動会などの地区行事のお知らせがあり可能な限り利用者と職員が参加している。近所の住民からカボチャをはじめとした夏野菜の差し入れもあり職員は常に感謝の意を伝え、ホームの手作り菓子などをお返しに差し上げている。地域の中学2年生の職場体験の受け入れや大正琴、巫女舞、フルート演奏などのボランティアとの交流も継続的に行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	安曇野市立堀金中学校2年生を福祉職場体験学習の受け入れをする。近所に住まれている(お嫁さんと義母)が施設見学をしたいと散歩途中に来られ見学をしていった。丁度お茶の時間だったので利用者と一緒にお茶を飲んでいった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度運営推進会議を開催し家族が交代で参加され区長・民生委員・市担当者を交えホームの状況報告と活動報告をした。区長より地域災害時対応地域の様子を聞く。参加者からの要望及び助言をして頂きホームの運営やサービス向上に生かしている。運営推進会議終了後日、朝の申し送り及び月1回の職員会議に全職員に報告、話し合いをしホームの向上に努めている。	定期的開催し、利用状況や活動報告をしている。その時点で運営上の課題についても出席する委員から助言や意見をいただいている。区長や民生委員から生の情報が入り、ホームの運営に活かしている。外部評価結果についてもその都度報告している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	書類や制度上の変更等で解からない事は市の担当職員に助言や相談に乗ってもらっている。介護認定更新、区分変更申請は家族からの依頼もあり代行している。認定調査員の訪問時、家族に代わり本人の様子を伝えられている。市主催の防災対策感染予防虐待等の講習会に参加している。	利用者の定員に空きが出た場合などに市担当部署等に情報を流しパンフレットを置かしていただくなど協力をいただけるようになっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	契約書で身体拘束利用者の行動を制限しないよう努めている。治療上医師の指示でやむを得ない場合は医師、管理者より家族に説明し、了承を頂いている。	日中、玄関は開錠されており利用者は自由に入出りでき、帰宅願望の強い利用者についても状況に合わせ職員が外に同行することにより気分転換している。身体拘束や行動を制限する行為については厳に戒めており、職員は正しく理解している。退院後、ホームに戻ってきた利用者が元気になり、家族からも自由に行動できていることに感謝の言葉が寄せられている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議で虐待防止について話し合いをしている。利用者の行動を受け入れるようケアについて話し合い、各個人がケアの考え方を伝え意思を合わせる、又助言をしあっている。		

グループホームよっころしょ！

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	市主催の成年後見制度講習会へ参加し、全体会議で報告し話し合いをした。職員は理解を深めてきている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所事前面談時契約書、重要事故説明書を家族に渡し、職員が読み上げ説明している。不安、質問等があればその時に話し合い問題点を残さないようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者家族の意見が聞ける様意見箱を設置してある。家族来所時管理者及び職員が本人・家族と話しやすい不雰囲気作りと場を作るようにして家族から要望等があった時はミニカンファレンスを開き、要望にそえるよう意見交換をする。職員と話しやすい雰囲気作りに努めている。	職員は利用者の意志を引き出すように、ことある毎に声がけしている。自ら意見や要望を言うことのできる利用者は三分の一ほどで、そのほかの利用者も職員の言葉がけに合わせ相槌をうち表情や仕草などで意思表示している。家族の来訪は少なくとも月1回あり、会社帰りに週数回立ち寄りの方もいて職員はその都度利用者の様子を伝え要望等を聞いている。担当職員から利用者のくらしぶりや健康状態について毎月手書きのお知らせを配布し家族との意思疎通を図りつつ何でも言っていたるように努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	運営推進会議では利用者の家族に交代で出席して頂き意見交換している。月1回全体会議を行い、意見を聞くようにしている。参加出来なかった職員には会議録を見てもらい伝達はしっかりしている。	毎月月末に職員の全体会議を実施し、運営上の課題や利用者の状況、行事やレクリエーションなどの反省と次月の予定などについて検討を加えている。利用料金の改定などについても会議の場へ職員の声も聞いている。職員からの相談事があれば管理者はいつでも応じており風通しの良い職場風土となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	夜勤手当の引き上げを行った。勤務表作成前に希望を聞き、希望に添えるように配慮している。日勤帯の昼休みはゆっくり休めるよう環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に多く参加するよう申し送り時に研修内容を報告し参加希望を募っている。参加希望がない場合は順番で参加してもらっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	里山辺にある有料老人施設の管理者、ケアマネと年1回の交流を持ち意見交換をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の感情を抑制させる事がないように傾聴し共感的態度で接している。利用者が望んでいる事を感じ考えるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設内を案内し家族がリラックスした中で家族の気持ちを配慮しながら聴くよう心掛けている。聴取にならないように注意している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	困っている事や不安な事に対して支援の提案、相談を繰り返していく中で必要なサービスに繋げるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の状態によりサービスを提供する事が大半の中全職員が介護する側される側を作らないよう努めている。利用者との会話で教えられたり励まされる事がある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族から頂く情報を大切に、ホーム側からも利用者の状態を伝え、一方通行にならないように心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族の希望・協力にて外泊、外出は可能である。	家族にも確認し了承をいただいた自宅近所の友人や知人を受け入れ旧交をあたためている利用者がある。その際に職員は利用者の居宅に湯茶やお菓子を運び歓迎している。あやめなど地域の馴染みの名所へ家族と出かけたり、お盆やお墓参りに一時帰宅する利用者もいる。家族とともに行き付けの美容院へ出かける利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	9名の利用者同士の関係は利用者同士で築いていくもので職員はそれを十分把握している。認知症のレベルによりコミュニケーションが困難な場合孤立しないよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	医療機関に入院され契約終了になった場合又 死亡退所になった場合には関係性なくなっている。家族等が個別に相談にきた時はその都度対応していきたい。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で把握に努めている。言葉や表情からその真意を推し測ったりそれとなく確認している。意思疎通が困難な方にはご家族か関係者から情報を得る。	その日の状態にも左右されるが数名の利用者を除き多くの方は言葉で意思を表わすことができる。利用開始時に本人の生活歴や嗜好等を家族から聴き、体験入所を経てホームに馴染めるかどうか判断し、ホーム利用後に入居当初のアセスメントシートに職員の気づきを加え日頃の支援の中に活かしている。職員が当日の夕食の食材の買出しに出掛ける際に食べたいものを利用者に聞くと自分の食べたいものやお菓子などを希望する利用者もいる。毎週金曜日のパン屋による出張販売の時にも一人ひとり好きなパンを選ぶようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前に調査、見学、家族の面会時に話を聞き、情報の把握をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者1人1人の生活リズムを理解に努める。出来ない面より出来る事を伸ばしていけるよう取り組んでいる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	個別に介護記録を作成し全職員が情報を共有している。変化があった時は随時カンファレンスを開いている。	各職員は2名から3名の利用者を担当しており、施設サービス計画の素案を作成後、利用者の暮らしをより良くするための援助目標・内容の検討を計画作成担当者と重ねている。サービス計画の見直しも3ヶ月毎に行っており、見直し前に家族から要望等を伺い計画に組み込んでいる。通常は見直し期に関係職員が集りサービス担当者会議を開催している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に介護記録を作成し全職員が情報を共有している。変化があった時は随時カンファレンスを開いている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	看護師が中心となり医療連携体制を整えている。看取りも行っている。通院や送迎等必要な支援を行っている。		

グループホームよっころしょ！

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	2カ月に1回、運営推進会議を行なっており、区長・民生委員の方にも入ってもらい協力して頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に今までの医療機関への継続の希望がある場合は受診にお連れし、また利用者の健康状態にに合わせて総合病院で受診する(家族の許可を得る)。更に入居時には協力医療機関を必ず説明している。	基本的には利用前からのかかりつけ医を継続している。月1回協力医療機関の医師による往診があるためそちらに変更する利用者もいる。定期受診の付き添いは家族にお願いしているが緊急の場合や必要な場合は職員が付き添い、その前後の家族への連絡・報告は看護師でもある管理者が窓口となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤の看護師を1名確保し医療連携体制を整えている。日常の健康管理・服薬管理・医療機関との連絡体制も整えている。また職員の医療・健康管理・緊急時の判断力の向上に繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の場合には総合病院の病棟看護師と利用者の情報提供及び交換を行なっている。また退院後の生活の準備を整え、当施設での生活が継続できるよう支援している。退院時は医師、看護師、栄養士、家族とカンファレンスをして今後の方針を決めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りケアカンファレンス及び同意書・医師確認書等を記入し早い段階から家族に説明し、並行して医師からも説明を受ける。また看取りケアを行う際、医師・ご家族と職員とでカンファレンスを行なう。契約時延命治療は行わず看取りを行う説明をする。	利用契約時にホームでの重度化や終末期に向けての対応が可能であることを説明している。そのような状態に直面した時点で「看取りケア指針」を説明し、同意をいただいた場合には家族、医師、職員で話し合いをしながら意思統一している。昨年度は2名の利用者をホームでお見送りした。職員も回を重ねることより、また、経験のある職員に相談したり教えを請い人生の大切な節目に立ち会えたことに満足感を示している。現在も終末期を迎えている方がいるが、退院後、ホームに戻り固形物を食べるできるようになり顔色や表情も豊かになってきており家族からも感謝されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の職員応援体制なども整備している。応急手当の仕方等も看護師が指導している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の協力体制については、自治会でお願ひしたり、運営推進会議で協力を呼びかけている。職員の連絡体制も整えている。	年2回、消防署員の指導の下、消防訓練を実施している。車椅子の利用者を含め、全利用者が避難訓練に参加し、通報連絡、消火訓練も同時に実施している。運営推進会議でも消防訓練の結果を報告しており地域の参加者に協力をお願いしている。開設時、文書で地区の方へ災害時の協力依頼もしている。利用者及び職員全員のヘルメットなどをはじめ防災設備も完備されており、食料品などの備蓄も5日間分用意されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人前であからさまに介護したり、誘導の声かけをして本人を傷つけてしまわないように目立たず、さりげない言葉かけや対応に配慮する。一人ひとりの誇りやプライバシーを傷つけないように職員の態度。言葉使いを徹底している。	利用者を人生の先輩として敬い利用者の呼び名も本人の望む形で呼び掛け、親しみも込めながら支援している。運営規定や契約書にも利用者や代理人の権利として個人として尊重され、プライバシーを保ち、尊厳を維持することなどが記載され利用開始時に説明がされている。排泄や入浴介助の異性介助についても利用者の意向に沿って行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は利用者と過ごす時間を通して利用者に合わせて声掛けをし、利用者の希望・関心・嗜好を見極め、それを基に日常のなかで本人が過ごしやすい環境を徒整えている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な1日の流れは持っているが時間を区切った過ごし方はしていない。一人ひとりの体調に配慮しながら、その日・その時の本人の気持ちを尊重して出来るだけ個別性のある支援を行なっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人主体で身だしなみを整えられるよう職員はお膳立てをしたり、不十分なところや乱れをさりげなく直している。本人の好みや意向を大切にしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と利用者が同じテーブルを囲んで楽しく食事ができるようにしている。旬の食材や新鮮な物を採り入れている。季節の行事食も取り入れている。	全介助の方が若干名いるが職員の声かけにより主菜、副菜をバランスよく食べている。おかゆ、ミキサー食、トロミをつけるなど一人ひとりの状態に合わせている。調理師資格のある職員や調理専門の職員がおり献立を考え、利用者もモヤシやインゲンなどの下ごしらえをしている。また利用者と職員でホットケーキやクレープなどのおやつを作ることもある。近所の方から野菜や果物の差し入れもあり、それに合わせてメニューを変更することもある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食時、食事の摂取量の確認と記録、食べ方の変化の記録と情報を共有・食事形態の工夫。毎食時・おやつ時の水分摂取量の確認と記録を行なっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行なっている。本人のレベルにあわせ、全介助や半介助している。夕食後には義歯を洗浄剤につけて消毒している。ご自分で出来る方にはやっていただいている。		

グループホームよっころしょ！

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄が自立されている方はもちろんだが、オムツ使用の方でもトイレ誘導をし排泄して頂けるよう支援している。	大半の方がトイレでの排泄ができ、職員が定時に声がけし自らトイレへ向かう方や手引きで誘導する利用者もいる。リハビリパンツとパット使用の方が多く、その時々状態に合わせ支援方法を見直したり、トイレの近くに居室を移したりしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、排便の有無を確認し本人の排便コントロールの状況に合わせて下剤を服用したり浣腸を行なっている。また食事摂取量と水分摂取量の観察をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	出来るだけ本人の希望に沿った入浴が出来るよう健康状態や事故防止に気をつけながら、出来るだけゆったり入浴できるように見守っている。	利用者は週2回以上入浴しており、脱衣場と浴室にそれぞれ職員が一人ずつ介助に入り、看護師も必ず立ち会っている。寝たきりに近い方も看護師を含めた4名の職員の手厚い介助を受け4面がオープンになっている浴槽に浸っている。利用者全員が入浴を楽しみとしており、保湿成分のある入浴剤なども使用している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	なるべく日中の活動を促し生活リズムを作る。一人ひとりの体調や希望を考慮して、ゆっくり休息がとれるように支援する。また寝つけない・不安な気持ちがあるときには、話しをしたり、添い寝をしたりする。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬内容は看護ファイルにまとめてあり、いつでも全職員が確認する事ができる。常薬や薬の追加等は看護師より振り分けられ、誤薬のないように与薬している。本人にも薬の説明をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で一人ひとりの出来る事を見出し、お願い出来るような仕事を頼み感謝の気持ちを伝えるようにしている。編み物、貼り絵等の趣味を生かして頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気・本人の体調や気分によって近所への散歩や車で外出に出かけている。お花見(桜)や薔薇園等にも出掛けている。	天気の良い日には寝たきりに近い方を除きホーム周辺を散歩している。外出時、車椅子が必要な方が三分の一ほどおり職員もその都度こまめに対応している。ドライブを兼ねて外出し昼食と重なる時には食事も取りホームに戻っている。	

グループホームよっころしよ！

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族よりお金をお預かりし、事業所が管理している。またお小遣い帳にて収支の管理も行ない、ご家族に毎月チェックして頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたたり、手紙を書ける方には希望に沿えるようお手伝いしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	台所とホールがカウンターのみで仕切られているので、調理している姿が見えたり、匂いを感じることができる。また食事作りを手伝って頂く時もある。居間には季節の行事に合わせた飾り物をしたり季節の花を飾っている。	平屋のホーム中央部の居間兼食堂には天窓があり柔らかな陽射しが入り冬場は床暖房も機能するので快適な環境となっている。神棚があり、畳のコーナーには日陰干しの洗濯物が見られなど普通の家庭と変わらない光景が見られた。キッチンもオープンになっており、トイレも車椅子対応の広いスペースが取られている。利用者は編み物やアクリルたわしづくり、漢字の書き取りや計算ドリルなどに励み、その成果として貼り絵作品なども壁に張られていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳コーナーには、小さな座卓があり、冬場は炬燵が置かれる。また居間には大きな机があり利用者同士話をしたり新聞を読んだりして頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際に利用者の使い慣れた馴染みのあるものを持ってきてもらうようお話している。布団もご本人の物を持ち込んで頂いている。壁には写真、本人の作品等を飾っている。	居間兼食堂を囲むように各居室があり、入り口には居室ごとに花の名前がつけられている。居室内はエアコンで快適に過ごすことができ、自宅から使いなれたタンスや家族の写真、テレビ、ラジオなどを持ち込んでいる利用者もいる。ホーム利用後に作成した刺し子や塗り絵を飾っている居室も見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリーでホール内・トイレ内には手すりがあり安全な環境の中で「できることを」やって頂いている。		